

第一部

「初瀬の梅」

歌…関根恵理子
詩…小川淳子
曲…千秋次郎
箏…重成礼子

「天女」

歌…小島三恵子
詩…太田真紗子
曲…小室美穂
横笛…松尾 慧

「凍蝶」 こむらね

ソプラノ、箏、太樟の為の抒情

歌…石渡千寿子
詩…佐久間郁子
曲…宮崎 滋
十七絃…梶ヶ野亜生
義太夫三味線…鶴澤三寿々

「宵待ち人」

歌…森田澄夫
詩…木下宣子
曲…池上眞吾
尺八…田嶋謙一
箏／十七絃…池上眞吾

第二部

「大樹」

ソプラノと尺八、箏のための

歌…中嶋啓子
詩…友永淳子
曲…中嶋恒雄
尺八…難波竹山
箏…雨宮洋子

組曲「つうの伝言」

歌…横山政美
詩…伊豆裕子
曲…加藤由美子
尺八…元永 拓

「月に聲澄む」

歌…きむらみか
詩…中西 遙
曲…高橋久美子
二十五絃…かりん
能管…滝沢成実

「まつりうた」

歌…桑田葉子／早瀬一洋
詩…高崎乃理子
曲…小森昭宏
尺八…米澤 浩
箏…熊沢栄利子
打物…多田恵子

ごあいさつ

社団法人日本歌曲振興会副会長
中村綾子

本日は、ご多忙のところご来場頂きまして、心より感謝申し上げます。
本会の「秋の定演」ではこの数十年、詩部門会員による新作詩に作曲部門会員が作曲し、その創作歌曲を声楽部門の会員が初演するという形をとって、新しい日本歌曲を発表してまいりました。

お陰様で二〇〇四年十一月に社団法人の認可を受けました。私どもは、未永く歌い継がれる日本歌曲の創作と演奏に更なる力を注いでいかなければと存じております。

また、「邦楽器伴奏による日本歌曲の創造」という新部門を立ち上げ、昨年三月に旧東京音楽学校奏楽堂に於て、デモンストレーションとして、第一回目の演奏会を開催いたしました。会の内外から広く既存の作品を集め、本会名誉会員で現代邦楽界の第一人者として活躍を続けておられる砂崎知子氏をはじめ、声楽家の青山恵子氏の賛助出演を頂き、華々しい門出を致しました。お陰で大好評、大成功でございました。

今回は、ほぼ会員による新作品、演奏でございませう。この度もまた、伴奏は勿論、邦楽家の皆様の多大なご協力を頂いております。まして、まことに有り難く御礼申し上げます。会員一同、更なる発展の為に力を注いでまいり所存です。日本人の感性が生み出した邦楽器を伴った新しい日本歌曲が、世界に翔たくことを願ってやみません。今後とも、温かいお見守りをよろしくお願い申し上げます。

「邦楽器とともにII」実行委員

伊藤香代子 木下宣子 千秋次郎 高橋久美子
中嶋恒雄 中村綾子 森田澄夫 横山政美

作品解説

「初瀬の梅」

初夏には全山が牡丹の花で覆われる奈良県桜井の長谷寺、この境内の蔵王堂に立っている「貫之の梅」と名付けられた紅梅に関する伝承と、これとは別に平安末期の物語集「大鏡」に記された「鶯宿梅（おうしゆくばい）」に関する貫之の娘のエピソードを結び合わせ、幻視的な一編の箏歌に託しました。二代にわたる紀貫之の父娘と梅の古木との心の交流を、優しく、そして愛しく歌います。

「千秋次郎（作曲）」

「天女」

太田眞紗子氏の歌集は、右脳を心地良く刺激してくれる栄養剤。言葉の響きの美しさはもちろん、たった三十一文字の短歌の中にいくつもの小宇宙が存在し、それらが限らない想像力と作曲意欲を与えてくれる。天女が舞う幻想的な光景を、ふと日常の中に見出したかのような不思議なリアリティを表現したかった。笛の音は言霊となり、歌声は祈りとなって、光の如く降り注ぐ。天女より現代へ送られるメッセージが、目に耳に心に、深く届きますように……。

「小室美穂（作曲）」

「凍蝶」——ソプラノ、箏、太棹の為の抒景——

私の詩の師は、蝶について博学であられた。自ら招いたとはいえ晩年は凍蝶の境遇のまま再び春に遭うことなく逝かれた。宮崎滋先生の曲と石渡千寿子先生の演奏を楽しみにしております。

「佐久間郁子（詩）」

歌作品に偏執的な愛着を覚えている私ですが、詩人と歌い手をこれほど身近に得て、三者三つ巴で新作に取り組む機会はめったにありません。しかも好きな邦楽器をサポートに書かせていただく稀有なチャンス！それだけに責任も重く、生来の筆の遅さに慎重さも加わった次第です。譜面は非定量記譜により、不確定性の要素を大幅に取り入れていきます。従って、歌パートを含め、暗譜はまず不可能です。奏者間の即興的な絡み合いの中から、佐久間さんの美しい詩の感懐が浮かび上がればと願いました。

「宮崎滋（作曲）」

「宵待ち人」——一枚の絵から

今回のコラボレーションで夢二をとりあげたのは、ずっと以前、美術雑誌所載の一枚の絵に衝撃をうけた私の経験によるものである。あの美人画の画家が！時を経てこの驚きを、作曲の池上さん・声楽の森田さんが共有して下さり今回の作品となった。だが夢二の森はさらに深く謎に満ちている。「宵

待ち人」はまだ終わらない。私たち三人はその絵をも音楽化し、かつてなつた夢二の世界を展開したいと思っ

「木下宣子（詩）」

「大樹」——ソプラノと尺八、箏のための——

この曲は、二〇〇五年にソプラノと箏のために作曲初演されたが、この度新しく尺八を加えて改訂し、初演することとなった。今日、作曲においては新しい手法がまったく開発されず、作品もほとんどの曲は一回初演されたのみで消えてゆく。ここでの創作は、感性の深まりにのみ道が残されている。従って私たち作曲家は、完成を目指してブルックナーがなしたように、何度でも作品を改訂し、再演する必要がある。どうか聴衆は一度で理解したと思わずに、この過程を見守って欲しいと思う。

「中嶋恒雄（作曲）」

組曲「つうの伝言」

一、ふぶき 二、つうの伝言 三、はばたく

もしあの時、与ひようが機織り部屋を覗かなかつたなら……。小学生の頃、「夕鶴」のつうを演じてから長い時が過ぎて、胸の奥から問いかけてくる想い。二曲目「つうの伝言」は、二〇〇六年二月に横山さんのリサイタルの折に初演されました。今回は序に「ふぶき」終曲に「はばたく」二編の詩を追加し、

ふるさとの吹雪の情景に重ねて、愛する者の心が見えなくなつてゆく哀しみ、心残しながら飛び去つてゆく光景を織り込んでみました。

「伊豆裕子（詩）」

「月に聲澄む」

能の老女物を念頭におき、能の構造を意識して着想した作品である。《姨捨》《卒都婆小町》《山姥》《融》などから一部詞章をとり、あいだを詩人の言葉で繋ぎ再構成した。山の庵で老女が旅人に昔語りし、時間は人間の命のサイクルを超え行きつ戻りつする。その時間性を大切にして、私たちは創作過程を吟味しながら進んだり立ち止まったりした。能の歩行の「ハコビ」のように。声の百面相を使い分けて、謡い語り舞う音楽である。「中西 遙（詩）」

「まつりうた」

今までに随分、曲書いて参りましたが、邦楽器だけという曲は初めてです。「まつりうた」は三つの部分から成っております。はじめはゆっくりとした導入部で、神様への祈り部分、なかほどはお祭り、そして最後は踊りになって、クライマックスに達するといった構成になっております。多くの方々に歌っていただけるような、親しみやすい親しみやすい曲になれば良いな——と思っております。

「小森昭宏（作曲）」